様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２９６

研究課題名（和文）ジョイスとベケットの小説における語りとコンテクストの研究と物語論の再構築

研究課題名（英文）Joyce, Beckett, Cotext and Reconstructing Narrative Theories

研究代表者
道木　一弘（DOKI, Kazuhiro）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０１９７９９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：1920年代から第二次世界大戦にかけてのベケットとジョイスの歴史的・文化的コンテクストを、フランスとドイツでの現地調査等を踏まえ、包括的にとらえることができた。その上で、最新の物語論（ナラトロジー）の知見を参考に、ベケットの初期小説群の語りとジョイスの小説（特に『ダブリンの人々』と『若き芸術家の肖像』）の語りを比較分析し、人物描写や場面設定等において応答的関係が存在することを突きとめた。
また、アイルランドの国民的詩人W. B. イェイツとジョイスの関係性を、ジョイスとベケットのそれを考える上でのモデル・ケースとして位置付けることで、伝記的・テーマ的アプローチを超える新たな方法論を提示した。

研究成果の概要（英文）：Based on my own research in France and Germany, I have succeeded in mapping the historical and cultural context of Samuel Beckett and James Joyce from 1920s through World War II. Then referring to the latest knowledge of narrative theories, I have elucidated the intertextuality of Beckett's early novels and Joyce's novels such as Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man. There exist elaborate correspondences between them in terms of characterization and settings.
Also I have analyzed how W. B. Yeats and his life are used and textualized in Joyce's Ulysses in order to set up a model study for overcoming biographical and thematic approaches and create a new methodology for explicating how text, author, and history are related to each other.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ジェイムズ・ジョイス　サミュエル・ベケット　物語論　コンテクスト

１．研究開始当初の背景
（１）ポスト構造主義物語論、すなわち作品（テクスト）と歴史的、社会的、文化的コンテクストとの関わりをめぐる研究が欧米を中心に多様な角度から行われており、筆者はその代表的な文献等を調査研究していたが、日本の英米文学研究においてはそうした取り組みは十分には進んでいなかった。
（２）独自のジェイムズ・ジョイス(James Joyce, 1882-1941) 研究において語りとコンテクストの関わりを分析し、ジョイスの代表作『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) を特徴付ける語りの多様性と一般的な意味での物語の不在は、周縁化され声を奪われた者たちに「声」を与える試みであることを明らかにした。その成果を 2007 年に博士論文（広島大学）にまとめ、2009 年にそれを学術書『物・語りの『ユリシーズ』―ナラトロジカル・アプローチ』（南雲堂）として書き直し出版した。
（３）ジョイスの後継者と目されるサミュエル・ベケット(Samuel Beckett, 1906-1989)の小説群とジョイスの小説の関わりを、語りとコンテクストの観点から分析した研究はほとんどなく、両者の作品と人生を視野に入れた語りの分析は構造主義以降の物語論を考える上で極めて大きな意義を持つと思われた。

２．研究の目的
アイルランド出身の二人の作家ジョイスとベケットの小説の語りを、歴史的、政治的および文化的コンテクストを視野に入れて包括的に調査・研究し、モダニズムおよびポストモダニズムと称されるこれらの作品が生み出された背景とその語りの可能性を明らかにし、さらには構造主義以降の物語論あるいはナラトロジー（narratology）のより柔軟で実践的な再構築を目指す。

３．研究の方法
（１）最新の物語論の動向調査と、（２）ジョイスとベケットの小説の語りの分析、および（３）ベケットの小説が生まれる背景となった場所の現地調査（フランスとドイツ）と資料収集の三つの作業を踏まえ、（４）「作者の人生」を視野に入れた新たな物語論の構築を行う。研究期間の前半では（１）と（３）が、後半では（４）が中心となる。尚、作品自体の分析となる（２）については、全研究期間を通して行う。最新の物語論の成果を基盤としながらも、単にそれを応用するのではなく、私自身が行う作品分析とコンテクスト調査から得られる知見を既存の理論に向き合わせ、いわば両者を常に「対話」させることによって行う。

４．研究成果
1920 年代から第二次世界大戦にかけてのベケットとジョイスの歴史的・文化的コンテクストを、現地調査等を行うことでかなり包括的にとらえることができた。こうした成果を踏まえ、また最新の物語論の知見を参考にしながら、ベケットの初期小説群の語りとジョイスの小説の語りを比較分析することを通して、両者の共通性と異質性を明らかにし、人物描写や場面設定等において応答的関係が存在することを突きとめることができた。具体的には主に以下の四つの成果に分けることができる。

（１）物語論および「語り」の研究については、構造主義ナラトロジーが持つ静的で閉じたテクスト観を克服するための多様な試みがオハイオ大学のハーマン(David Herman)、フライブルク大学のフルダーニク(Monika Fludernik)、コロラド大学のライアン(Marie-Laure Ryan)らによって精力的に行われており、こうした文献等を系統的に収集・精査することができた。また、本研究期間中に年３～４回の研究会を開催し、これらの文献が持つ意義や問題点について議論を深めることができた。
　特に問題点としては、認知心理学に基づくハーマンのスキーマ(schema)あるいはスクリプト(script)といった、人間に内在する物語への指向性といった考え方や、フルダーニクのいう自然化(naturalization)という考え方では、物語をあえて破壊するようなジョイスやベケットの小説を解明する上では不十分であることが明らかになった。

（２）ベケットの初期小説、特に『並みには勝る女たちの夢』(*Dream of Fair to Middling Women*,1932/1992) と『蹴り損の棘儲け』(*More Pricks than Kicks*,1933) の語りを、ジョイスの『ダブリンの人々』(*Dubliners*, 1914) および『若き芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) のそれとを比較分析することを通して、明確なプロットの不在という共通性と、超越的な語りをめぐる異質性を明らかにし、人物描写や場面設定等において共に古典作品の枠組みや演劇論を下敷きにする等の応答的関係が存在する。
　具体的には、①『並みには勝る女たちの夢』と『蹴り損の棘儲け』に共通する主人公ベラックァの三つの特徴、すなわち怠惰(indolent)、過剰な自意識および他者の痛みへの無関心は『ダブリンの人々』中の短編 「痛ましい事件」(‘A Painful Case’) の主人公ダフィーに共通するものであること。また、②indolent の語源は not feel pain「痛みを感じない」であり、この語源が物語の核となって、一見無関係な出来事の間にプロットを生み出していること。③ベラックァはダンテの『神曲』に登場する同名の人物をモデルとしているのに対して、スティーヴンはオヴィディウスの『変身譚』に登場するダイダロス/イカロスをモデルとしており、共に古典世界を作品構成の下敷きにしていることである。こうした通常の物語論では扱われることのないメカニズムによるプロットやナラティヴの生成は

ジョイスとベケットの作品に共通する特質であると言える。

さらに、『若き芸術家の肖像』では、スティーヴンが語る美学論において、馬車の事故による少女の死が「悲劇」ではないとされるが、『蹴り損の棘儲け』では、バスの事故による少女の死が具体的に描写されることで、「悲劇」として成立している。この両者を結ぶものはアリストテレスの『悲劇論』であるが、彼は悲劇の本質を「おそれ」と「あわれみ」として定義している。ジョイスの場合、この定義に基づいて馬車の事故による少女の死を「悲劇」でないとし、一方ベケットはこれと極めて似た状況を再現しながら、これを「悲劇」として成立させることから、そこにはアリストテレスとジョイスへのアイロニーが込められていると考えられる。つまり、ここでベケットが意図するのは、悲劇を生み出すのは内在的（本質的）な要因ではなく、その「語られ方」であることを示すことなのである。

従って、語りの問題は両者の関係性を考える上で中心的な問題であることが改めて浮き彫りになった。但し、ジョイスの場合は常に超越的な語り手の存在が暗示され、それが作者による言語操作と物語世界への介入を強く意識させるのに対し、ベケットの場合は、そうした超越性が周到に回避されている。この点はジョイスとベケットの作品の特質を比較する上で極めて重要な意味を持つと考えられる。

以上の具体的な成果のうち、①から③は 2011 年 7 月にベルギー王国リューヴェン大学で開催された国際アイルランド文学大会で発表し、翌年、加筆した原稿を大学の所属講座研究誌に論文として発表した。また、『悲劇論』および語り手の超越性の有無を巡る問題に関しては、2013 年 10 月の中四国英文学会で研究発表を行った。

さらに、発展的な試みとしては、2013 年 6 月に開催された日本ジェイムズ・ジョイス年次大会において、シンポジウム「ジョイスと動物」を主宰し、近年注目を集めている動物論とジョイス作品の関わりを、語りの問題から議論し、特にデリダの動物論を検証する上で、ジョイスの『スティーヴン・ヒアロー』(*Stephen Hero*,1905/1963)と『ユリシーズ』が示唆に富んでいることを明らかにすることができた。

デリダによれば、人間と動物の二項対立は純粋に言語によって構築された関係性であり、何ら存在論的な裏付けを持たない。それはデカルト以来の動物観を継承したものであるが、とりわけ『ユリシーズ』の主人公ブルームは動物=他者の視線を内在化する試みを日常的に行うことでこうした関係性に揺らぎをもたらし、さらに『ユリシーズ』というテクスト自体がこうした二項対立を突き崩す流動性を備えているのである。

以上の成果は報告として 2014 年 6 月発行予定の *Joycean Japan* 24 号に掲載が決定している。

（3）作品のコンテクストを調べるための基礎的調査として、若きベケットが小説を構想する上で重要な役割を果たしたと思われるドイツ中央部のカッセルと東部のドレスデン、また第二次大戦中にレジスタンスとして潜伏したフランス南部のルシヨンで現地調査を行い資料収集した。その過程で、①ベケットがナチス・ドイツによって「頽廃芸術」との烙印を押された表現主義をはじめとする現代美術に深い関心を示し、いわゆる『ドイツ日記』(German Diaries, 1936-1937)と呼ばれる「作品」を残しており、その分析は海外でも未だ十分になされていないことと、②第二次大戦中の彼の思索等を含めて謎の部分が多く残されていること、が明らかになった。また、③この時期に書かれた彼の作品のインスピレーションとなった恋人ペギー・シンクレアの住居跡を確認することができたことも大きな収穫であった。最近の研究ではコンテクストも語り（ディスコース）によって生成されることが共通認識になりつつあるため、ジョイスとベケットの人生を視野に入れた語りの分析を行う上でこうした現地調査および資料収集は大変有意義であった。

（4）ジョイスとアイルランド詩人 W. B. イェイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) との関わりを、特に 1916 年のイースター蜂起に対する政治的スタンスという観点で調査・分析した。イェイツはジョイスのみならずベケットにとっても、作品の歴史的・文化的コンテクストを考える上で重要な位置をしめるため、イェイツとジョイスの関係性を研究することで、ジョイスとベケットの「人生」を作品化の問題から考える場合のモデル・ケースとして捉えることが可能である。

具体的には、イェイツの人生と作品が『ユリシーズ』の三人の主人公を造形する上で重要な働きをしていることを以下のように突きとめた。①ブルームとスティーヴンの年齢差は、イェイツとジョイスのそれに一致する。②ブルームの妻モリ―の早世した息子に対する悲しみと、その再生を暗示する言葉「輪廻転生」(metempsychosis) は、イェイツが愛したモード・ゴーンが同じく息子を幼いうちに失い、その再生を願ったことを反映している。③スティーヴンが死んだ母の亡霊に苦しみ、そこからの救済を願う時、イェイツの詩「ファーガスと行くのは誰か」(Who Goes with Fergus?) が重要な役割を担っている。

こうした分析と発見により、従来の伝記的・テーマ的アプローチと作品の分析を有機的に組み合わせ、単なる伝記的事実の集積を超えるための新たな方法論（単語レベルから語りのメカニズムを含めた包括的分析）構築に向けた基礎的研究を行うことができた。

以上の成果は、先ず 2011 年 10 月に韓国で

開催された国際イェイツ学会および 2012 年 6 月の日本ジェイムズ・ジョイス協会年次大会において発表し、それぞれ加筆した原稿を、韓国イェイツ学会誌（英文）と所属大学の講座研究誌に論文として発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
①道木一弘、『ユリシーズ』の中の W. B. イェイツ、愛知教育大学『外国語研究』、査読無、46 号、2013、33-49
②道木一弘(DOKI, Kazuhiro)、Yeats in Joyce's *Ulysses*、The Yeats Journal of Korea、査読有、Vol. 37、Spring 2012、89-99
③道木一弘、ベラックァと身体の「痛み」について－サミュエル・ベケットの *More Pricks than Kicks* に関する一考察、愛知教育大学『外国語研究』、査読無、45 号、2012、71-84
④道木一弘、Yeats, Joyce and the Easter Rising: Textual and Contextual Significance of "U. P." in *Ulysses*、愛知教育大学『外国語研究』、査読無、44 号、2011、31-43

〔学会発表〕（計　５件）
①道木一弘、ジョイスを読むベケット－二人の少女の死とその語りについて、日本英文学会中国四国支部第 66 回大会、山口大学、2013.10.19.
②道木一弘（兼司会）、小林広直、南谷奉良、山田幸代、シンポジウム：ジョイスと動物、日本ジェイムズ・ジョイス協会第 25 回大会、京都大学、2013. 6.15.
③道木一弘、『ユリシーズ』の中のイェイツ、日本ジェイムズ・ジョイス協会第 24 回大会、専修大学、2012. 6.16.
④道木一弘(DOKI, Kazuhiro)、Yeats in Joyce's *Ulysses*、International Conference on W. B. Yeats and Modern Poetry (The 20th Anniversary of The Yeats Society of Korea）、Hanyang University、ソウル（韓国)、2011.10.30.
⑤道木一弘(DOKI, Kazuhiro)、Belacqua's Painful Case in More Pricks Than Kicks、The 35th IASIL International Conference、リューヴェン大学、リューヴェン（ベルギー王国)、2011.7.19.

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
道木　一弘（DOKI, Kazuhiro）
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10197999

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：